

Title	シモンド、ド、シスモンテの生涯
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.6 (1910. 12) ,p.683(79)- 706(102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101200-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101200-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レパブリカン黨はルーズヴェルト氏自身の選挙區に於て尙ほ六十票、更に甚だしきは同氏自身のナツソウ郡に於て三百票の敗北を爲したるに加ふるに國會議員の競争にもレパブリカン黨の候補者にして、ルーズヴェルト氏が大統領たりし當時常にスポークスマン其代表者たりし現議員コックス氏が、ルーズヴェルト氏自身故郷郡に於てデモクラット黨のリットン氏の爲めに敗られたるの事實を指摘すれば以て充分なる可しと信ず。

雜 録

シモンド、ド、シスモンヂ  
の生涯

高橋 誠一郎

(十三)

大ナポレオンの百日天下は終に亡びた。同盟軍は最後の勝利を得た。佛蘭西は再び王政復古の世と爲つた。けれ共ナポレオンは長く長くシスモンヂの心を征服して居つた。彼が親しく謁見したナポレオンは最早権力と光輝とに人目を眩するのみの人ではなかつた。彼の思想は既に業に成熟の域に達し、其頭腦は漸寂然たる和平の境に入らんとして居つた。聖ヘレナの謫所に響雷の如き終焉の一默を傳ふる時も已に遠くはなかつたのである。一千八百十五年、彼は復もコッペの人と爲つてステール夫人の變らぬ友情に迎えられたが、ジェ

ユーヅ市は同じ温情を以て彼を迎うることをしなかつた。彼の友人等は彼を目して友に背き自黨に叛くものとなした。これ即ち彼が目的の爲めに其手段を見逃さなかつたが爲めである。彼が殊更に外國の干渉を恐れて居つたが爲めである。彼が長く信づることの出来なかつたジャコビン黨と王黨との同盟が彼の胸に深い嫌惡の念を與へたが爲めである。而して彼の心緒が此憎惡の戦鬪に破れたが爲めである。斯くて荒された田園、掠められた都市を見た彼は「予は富める者、吾人の上に此刑答を加へたる者の困苦に對しては自ら慰むることを得可けんも、然も、然も不幸なる小農夫の零落、疾苦、絶望の有様は實に我が心胸を劈くの想あらしむるなり」と叫ぶを禁ずるを得なかつた。彼の朋友であつたラベドイエア及びネー將軍の死や、南方に對する迫害や、王黨の横暴や並に「國民議會の取つた所と飽くまで反對の態度」など事々物々悉く皆彼の思想を憂愁ならしむるの種と爲らぬものはなかつた。而して「あらゆる追懷は彼

に取つて慰安と爲るよりも寧ろ多く悲哀の因と爲ること多きを知つた。彼は暫く著作の裡に隠れて其悶々の情を遣らんとした。則ち彼は自ら「予は須臾も自己を忘れんとを努めて止まざりき、而して幸にも予が研究は予をして今の浮世と隔りたる他の時代に予を生息せしむることを得せしめたり」と稱して居る。

一千八百十七年七月、其史稿の最後の四卷を上梓せんが爲めに巴里に赴かんとして居つたシスモンチは端なくもコツペに引留めらるゝことゝなつた。ステール夫人は今や冷き骸と爲つて巴里から此處に運ばれたのである。コツペの寄寓に謂ひ知れぬ快感を興へた彼女、長く彼の良友として第二の姉として常に情愛を變へなかつた彼女は終に永く此世を去つたのである。シスモンチは母に書を寄せて云ふ「地を隔て、起りたる不幸は容易に之を信ずること能はざるものに候。初め人は其周圍に何等の變を認むることなきが故に殆ど其事實を信ずること能はず、唯だ次第次第に憂愁の念は吾

人を捕へ來り候て、終には耐え難き苦痛の淵に陥らしむるものに候。小生が常に家郷に在るの心を以て最も幸福なる日子を送りたる此地の寄寓は最早終を告げ候。小生が初めて世界の暗を照すを見る魔燈は長へに其光輝を滅し申候。小生が幾多の智見を得たる樂しき交際社會の戸は永劫に鎖され申候。予が生涯は大なる損傷を受け申候。恐らく小生は何人よりも最も多く彼女に負ふ所ありしこと、存候。夫人の埋葬の日小生は如何に苦悶し候よ。靈柩前に跪坐せるブローリ夫人とランドール嬢との面前に棺架の傍に立ちてコツペの法教師が追悼の詞を述べたる時、張りつめたる小生の心はくづおれ候て、予が蒙りたる損傷を遺憾なく感せしめ候、而して予は紅涙の漣然として降るを止めあえず候ひき。」

シスモンチは其偉大なる著述の終編を出版するに當つて彼が其歴史の研究に盡瘁した二十二箇年間の過去を顧みた。彼が此史編の稿を起した當時に抱懷したと同じ心の傾向、同じ政治上の主義は其心意に宿つた諸般の學說をも動しつゝあつたのである。

(十四)

其第十六卷の最後の頁にも之を認めることが出来る。彼は甥に自負の微笑を湛えたであらう。「此長い時期の間に、自由に渴した國民と頑強に之を與ふることを拒んだ君主との熱烈なる争闘に惱まされて、歐洲の制度組織は幾度か破壊せられ、而して政治上の主義が交互に消長するを見た」、然しながら此歴史家は依然として昔日のまゝ其態度を變じなかつた。彼は啓蒙せられたのみで毫も變化を受けなかつた。時代は彼の思想を擴大したのみで決して之を棄却せしめることがなかつた。

彼は一千八百十七年犀利なる筆を以て痛く奴隸賣買を攻撃した、更に一千八百二十三年には希臘の釋放に熱中した。彼は自由を得んとして盡瘁し、事成らずして壓制治下に呻吟しつゝある幾多の國民の悲壯なる企圖を讚美した。彼が人類同胞を愛するの念は最も誠眞、活潑にして且つ普遍的のものであつた。而して其貴い情熱は彼に絶大の歡喜と深甚なる苦悶とを與ふる力を有して居つた。そは又單に彼の精神的傾向を支配したのみならず

シモンド、ド、シスモンチは十九世紀の社會に甚大なる効果を及ぼしたかの經濟上の大革命を助成し來つた一人である。彼は任意自由の生産及び交易を支障した幾多の獨占業並に商社や組合や舊慣が國內に築き上げた墻壁を撤去して勞働の自由を得せしめ、貨物の多量生産と之が循環の自由を刺激し、自由競争の作用を奨励し、自然の力をして正確巧妙迅速有效に人間の事業を完成せしめ、克服せられた自然力、科學の教えた諸般の技術、集積せられた貨本の作用及び富に憧憬るゝ強い心的衝動に助成せられつゝ、産業上の奇蹟を現實世界に現出せしめて國家の富源を著しく増大した個人的自由の學說を繼承し、其嚇々たる效績を稱揚することを怠らなかつた。

然しながら彼は臆て更に深く社會の真相に立入つて考察するの機會に到達した。而して容易く人

類の進歩を誇り、自由放任の主義が人間社會の幸福を増進せしむるの事實を永く確認すること能はざるに至らしめたる光景は新學說が最も完全なる發達を期げ、偉大なる力と權威とを以て國民を支配しつゝある英國に於て先づ彼の眼に映じたのである。彼は抑も此自由學說の郷土に於て何物を認め得たのであるか。無制限なる生産は幾多の利益を齎すと共に其反面には又少なからぬ弊害を生じつゝあるのである。産業の進歩はあらゆる生活資料に革命を惹起してゐる。鎖された市場は全住民をして餓死せしめんとしてゐる。自由競争の作用は不規則である。各人皆利を逐ふて營々たるの狀態は戦争よりも尙ほ破壊的である。彼は人間が自己よりも更に有力なる機械の撥條と化し、人は天壽の半ばをも保つ事能はずして、家族的關係の失せ、道徳的觀念の全く消え果てた不健全な場所に群居するの已むなき有様を見た。彼は最も孱弱な幼年が勞働を強ひられて其心性を墮落させ、夭く其健康を破るに至るを見た。彼は地方の村落が

都會と同じく製造工業地に改造せらるゝを見た。大工場の發達に伴れて小資本小經營の手工業は烈日を受けた霜の如くに消滅した。小百姓や職人は日給の勞働者と爲り、日給の勞働者は最も低い、最も貧しい階級に陥つて終には救貧法の扶助に辛く生活する窮民と爲つた。一言にして盡せば彼は此大國民の繁榮を隱に脅かし、悼ましくも其名譽を侵しつゝある窮苦の極と怕る可き墮落とを見たのである。

美しい自由制度の裏に潜む陰暗たる影に驚き惱んだシスモンデは自ら問ふ事を禁じ得なかつた。經濟學の名は其本然の意義に遡つて考ふれば正に一都市及び一家族を支配する法則を意味するものである。然るに財富の生産の爲めに人間の幸福を犠牲とし、幾千萬の勞働階級を抑壓して之に日常の麵麩すら與えないものが眞の經濟學と謂ふことを得るであらうか。彼は大なる否定を以て之に答へた。而して政府と國民に彼等を襲ひつゝある危険を教えんとして警告の絶叫を發したのである。

此時より彼は經濟學の主たる目的たる可きものは唯だ抽象的なる富の生産にあらずして寧ろ其公平なる分配である可きことを論争するに至つた。十八世紀に於て社會上の人類は悉く皆法律上全然自由平等の權利を有することが宣言せられたと等しく、今や實際經濟上に於ても勞働に従事し幸福を享受するの正當なる權利を有することを主唱した。彼は是等の意見を一千八百十九年に出版した著書の内に發表して居る。題して「政治經濟の原理、一名財富と人口との關係 (Les nouveaux principes d'économie politique ou de la richesse dans ses rapports avec la population)」と稱するものは即ち是で、一千八百三十八年に最後の訂正増刻を行つて今日に傳はつてゐる。此著は二部に分れて、一は土地所有權並に耕作者の狀態 (richesse territoriale et la condition des cultivateurs) 及び他は商業上の富並に都市住民の狀態 (à la richesse commerciale et à la condition des habitans des villes) に関するものである。彼は土地を大農圃として他に貸與

するの影響、及び土地に工業組織を適用するの影響を指摘し、其結果は麥畑を變じて牧場と爲し、人間の代りに機械を使用し、終には土地より人間を放逐して羊の群を棲ましむるに至ることを聲明した。彼は又自由競争の害惡、生産の動亂及び過剩を攻撃し、暢達の筆を以て其指導を誤られたる産業界が頻々として恐慌の襲來を受け之が爲めに急激なる破滅を受くるに至るを痛嘆して居る。

シスモンデは單に聲を大にして這般の害惡を江湖に曝露したのみで之に對する救濟策を示さなかつた。彼は此書中の那邊に於ても敢て這個の傾向を緩和し、更に進んでは共同財富の分配を制規す可き權力を社會に附與せんとはしなかつた。即ち斯くの如き場合には社會をしてあらゆる貨物の生産を監督し、あらゆる私有財産を廢止し、人間の才能の最も自由なる發動を妨害し、其進路を要塞し、其企圖を制限し、其智識を拘束せなければならぬが爲めである。斯くてシスモンデは問題を社會に提出したまゝ、自ら之が解決を行はんとはし

なかつた。(但し彼は此書の第二版に於て二個の救濟方法を講じ、第一に結婚法を制定して一身一家を維持するの能力なきもの、結婚を禁止し、第二に雇主をして労働者に其生計最少限度の勞銀を與ふるの義務を負擔せしめんことを主張して居るが前者は一千八百二十七年の第二版を以て之を除き後者は一千八百三十一年のチャンニングに與ふる書中に其効果を疑ふに至つた。)

そは兎に角彼の警告は好く時代の必要に應じた頗る有益なるものであつた。是等の警告は經濟學者の注意を惹起し政府の醒覺を促すに有力なる貢獻を爲したのである。是等の警告は同情心に富んだ氣早な人々を驅つて労働組織に關する實行す可らざる方策を案出せしむるに至つた、而して彼の議論は又全然夢想を脱却することが出来なかつたが、斯くの如き實際的にして殆ど空想に憧憬る、傾向のない時代には何等の危険をも齎らさなかつたと稱して可なりである。而して彼の議論は着々として其實際的效果を表すことが出来た、生産業

者をして其企業に對して一層細心なる注意を拂はしめ、雇主をして其備雇に係る労働者に對して一層寛大なる待遇を爲さしめ、労働者自身をして一層秩序の觀念を重せしめ、節約心を喚起しむるに至つた。此有利なる衝動に助けられて、國家は其實力の許す範圍内に於て労働階級の進歩と幸福を計るに努め、幼年者の労働を制限し、避難所を開き小學校を増設し、貯蓄銀行を創設し、労働仲裁局(Conseils de prud' hommes)を設立し、而して當然利益を享得す可き是等の階級をして教育、財産及び公正なる裁定を得せしむるの道を便ならしめた。

謂ふまでもなくシモンド、ド、シスモンチが熱心に攻撃した社會制度の缺陷は悉く皆之を排除するものが出来なかつた。其内の或物は社會制度本來の性質に附隨して引離すことの出来ぬものである。凡そ一事一物皆悉く長所の裏に短所を藏して居らぬものはない。嚴格に過ぎた規矩準繩に拘束せられると人間の性質は萎縮して醉生夢死の生涯を

送ることゝなる。之を解放して絶對の自由を得せしむると兎角放逸過度の發達を期げることゝ爲る。極端に流るゝことなくして自由に向つて進み、安全に富を享得し、自己を詐ることなくして其智性を使用し、罪惡を犯すことなくして七情の發動に従ひ、自己の利益のみに盲進することなくして其欲望を經濟的に満足することが出来たならば寔に幸福の極である。然しながら神は斯くの如く生活を容易に、人間を穩和に、世界を規則正しくは創造しなかつた。彼は生活の満足、人間の圓滿なる發達及び世界の平衡は長く然も大なる努力の結果に由つて初めて購はる可きものであると命じた。然しながら此偉大なる目的に向つて進ましめんが爲めに神は常に人性を指揮して人類相互の關係を愈々改善するの途を得せしめんが爲めに人に智性を與へ、其正路を離れて行動するを避けしめんが爲めに正義の觀念を與へ、災厄不幸を救護せんが爲めに慈悲の感情を與へてゐる。

シスモンチが經濟學上の新見解は之より先き一

千八百十八年に出版せられたエディンボロー百科辭典中の「政治經濟」の一項に現れた。彼がブリュースター博士の依頼を受けて英文を以て其稿を起したのは一千八百十五年のことである。彼は其内に近代の労働關係及び自由競争の弊害並に生産の過剩に就いて其新見解を略述してゐる。即ち是に由つて觀ると彼は早く此當時よりしてアダム、スミスから離れて、此偉大なる蘇國の經濟學者が唱道した經濟學の原理を去り、別箇の意見を以て之を説いたことが明白である。常に實際社會の事情を觀察することを怠らなかつた彼の心は單に系統的に演繹より演繹にと進み、嚴密なる數理的推論を以て一系の形而上的命題を構成するの愉快のみを以て満足することが出来なかつた。學者の導いた幾多の結論は實際の經驗に照して、其誤謬を指摘することが出来た。此實驗的哲學者は巧妙なる論理に誤られて獨斷的の推定に盲従することが出来なかつた。斯くて彼は「自由競争の弊害は平和の時に於ける戦争と等しきものである、生産過

剩の結果として更に消費者を發見することなきに至つた其瞬間から財富は其財富たる所以を失ふものである」との結論に到達したのである。

「政治經濟の新原理」二卷に至つては此最初の略説よりも更に一段の發達を示してゐる。彼は曩に商業上の富 (La richesse ou principes économiques de la législation du commerce) 一著した後、書籍に代へて事實を研究し、茲に全く經濟學を新しい基礎の上に置くことゝ爲つた。時人は彼を非難して前の著書よりも遂に退歩したものと爲した。「普く全歐洲に亘つて夥しく生活資料を傾盡して最も大なる壓迫を勞働階級に與へた商業上の恐慌に痛く動されて」彼は資産家、政治家及び著述家の盡力が相合して弊害を矯正せんとして却つて之を助長し、純收穫を増大せんが爲めに眞の收穫を減少し、而して尙ほ未だ瑞西及び伊太利の小農夫の間に多大の安慰と幸福とを弘布しつゝある耕作方法を變革するを見て遺憾に絶えなかつた。「賢明なる人々は人口を増大す可き方法と財富を増加す可き方法

とを別個に探究するが爲め往々にして弊害を醸し失敗に歸すのである。此等の二者は互に相分離して考察せられた時は單に空論に過ぎざるものである、而してあらゆる空論は悉く皆直ちに信す可らざるものである。眞の問題は一定地域内に於ける吾人々類に最大の幸福を確保せしむ可き人口と富の割合を發見するにあるのである。經濟學の目的たるものは人類間に於ける幸福の量を増大し、而して其分配を均等ならしむるの一事である、政治學の目的たるものは道徳心を各階級に浸潤せしめて國民全體を高尙ならしむるの一事であると彼は思惟した。

「政治經濟の新原理」は正に經濟上の比例均衡を唱道した著述である。特に社會問題の眞相は適當なる均衡を得るに在るの事實を闡明するを以て其目的としてゐる。曰く「所得は資本と共に増加せざる可らず、人口は其據つて以て生活することを得可き所得額を超えて増加す可らず、消費は人口と共に増加す可く、而して再生産は之を産出す可

き資本並に之を消費す可き人口の二者と比例して行はる可きものなり」と。

這般の諸關係が分離攪亂せられた時、必ず常に社會は損害を免れ得ざるものであると云ふ事實を證明して、シズモンデは「勞銀は消費に起因する勞働に對する需要の多寡に比例せるものなり。而して勞働に對する需要はリカード、セー及び彼等の學徒が主張するが如く生産若しくは欲望の種類に由りて決定せらるゝものにあらずして、全く所得に由りて定まるものなり。即ち各個人は其資力に應じて購買するものにて、決して其欲望に従つて之を行ふものにあらず。幾多の學説は社會が單に個人に由りて組織せられ、常に私有財産の集合に過ぎざる社會的財産は各個人の財産と等しき方法に由りて發生し、且つ増加、分配、減少、破壊せらるゝものなることを往々にして忘却しつゝあるなり」との警告を發して居る。

彼は兎角自負心の強い學者に有り勝ちな誇大の言を弄して彼の新學説は地球をして新しき樞軸を

回轉せしむることを得たとか、普く社會の病患を救治す可き效驗ある萬能藥を發明したとか云ふ様な附景氣をして自ら憚るとをしなかつた。有效なる救濟策を發見せんが爲めには時の經過と最も秀抜なる人物の協力一致が必要であるとは彼が斷えず揚言した所である。洵にミシエレーがシズモンデを表彰した有名なる講演中に述べたが如く「彼の名譽は社會制度の弊害を指摘した點に存するのである。斯く社會の缺陷を指摘し、將來の危機を豫言するが爲めには大なる勇氣を要したのである。然しながら之に對する救濟策を講ずるの一事は同一人物若しくは同一時代の任務ではなかつた。政治上の封建制度から吾人を解放するが爲めには五百年の歲月を要したのである。産業上の封建制度から吾人を解放するの大事業は僅々數年の日子を以て到底能し得る所でない」のである。

斯くてシズモンデの述作は懇請と悲哀の調子を以て社會全般に對して其壓碎した弱者を救護せんことを訴へてゐる。而して彼は實際社會に立ちて

も、其日常の私生活に於ても人類同胞に對する最も美しい人間の感情を自ら維持せんことを努め、其理想及び其行動を最も優しき慈善心の發動に置いて、他に與へ、他より受くる其心意の二重の發作に慰安の途を求めて居つた。

(十五)

吾人は茲にシスモンチが定期の雜誌に投稿した幾多の重要な論文や、政治及び歴史に關するもの、さては文學に屬するもの杯多數の製作に就いて一々之を逃ぶるの餘白を有して居らぬ。鬱勃として胸裡に叢生する百般の思想は之を其椽大の筆に寫して上梓するとを禁じ得なかつたのである。然しながら試みに今其一二を摘記すると教訓的小説にジュリア、セヴエラ(Julia Severa ou l'an 49)と題する者がある。此は疑もなく遙に戯曲的描寫の助を借りて深く歴史の祕奥に立入つた有名な小説家の跡を學んで興味を喚起するよりも寧ろ明確に蠻族侵入の秋に際會した四百九十二年の

ールの状態を讀者の眼前に描き出さんとを努めたのである。一千八百三十二年にはタードナーの百科全書中に中世紀に於ける伊太利諸共和邦(Italian Republics of the Middle Ages)と云ふ表題で其大著伊太利共和邦史の抄録一卷を出版し其後間もなく同一の抄録(Precis des Républiques Italiennes)を二巻として佛文で出版した(Histoire de la Renaissance de la Liberté en Italie et ses Progrès, et sa Décadence, et sa Chûte)。次で彼は同一百科全書中に紀元二百五十年より一千年に至る羅馬帝國の滅亡及び文明退化の歴史(History of the Fall of the Roman Empire)を記し、更に佛文を以て二巻と爲して出版した(Tableau de la chute de l'Empire Romain et du déclin de la civilisation de l'an 250 à l'an 1000)。此は彼が一千八百二十年から翌二十一年に亘つてジュエニッツで開延した中古上半期の歴史と題する講演に基いた者である。而して吾人は又彼が社會科學の第一卷(No. 1, des Sciences Sociales)として一千八百三十六年に其第一編を出版

した自由國民の狀態に關する研究(Études sur les Constitutions des Peuples Libres)に關しても多言を費すの餘裕がない。要するに此著は彼が青年時代に抱懷して居つた理想が實驗的の研究と爲つて現れたものである。彼は此書に於て政治社會の種々なる形態を闡明し、政體に關する各個の主義の性質及び價値を估料し、國家は其内部組織の自然的發達に由つて自由の方向に進む可きもので、決して其固有の歴史と没交渉なる學說を勿急に適用して強ひて自由主義に迎合す可きものではないことを教えてゐる。

彼は一方に於て致々として其畢世の大著佛蘭西國民史(Histoire des Français)の稿を急ぎ殆ど毎二年置きに二卷乃至三卷を出版すると共に他方には尙ほ其餘力を以て佛、伊及び英に於ける文學上並に政治上の思潮に注意を拂ふを怠らず、絶えず其意見を或は小冊子として出版し或は各種の定期刊行物に投稿して居つた。吾人は其到る所に彼れが常に不幸に左袒し、自由を擁護し、中庸を以て

旨としつゝあることを發見することが出来る。

一千八百二十六年彼は其「新原理」の第二版を刊行するに先立つて英國に旅行を試みた。彼は此島帝國に於て其曾つて預言した事實が正に實現せられつゝあるを見た、而して「先づ勞働者から其雙手を除くの外、あらゆる資産を悉く剝奪し、更に進んで彼より其唯一の資産たる雙手の働きをも奪つて終に器械をして之に代らしむるに至つた社會組織」の致命的效果に戰慄するを禁じ得なかつた。「産業の發達は各人の間に於ける享樂の不公平を増加せしむるの傾向あること」を目撃し、富の分配方法を過つたが爲めに發作した怖ろしい劇動の光景に我知らず畏縮して、彼は「英國の繁盛は當初先づ人目を眩惑するものもある、然も同國が其般富の眞唯中に吾人に示したるもの、如く驚く可き奇觀は他にあらざる可し。工場を解雇せられたる乞食の群と、農業上の勞働を行はんが爲めに雇主を求めて耕圃より耕圃に輾轉する見すばらしき愛蘭人の群とは交互に大路を遮ぎりつゝあるな

り。彼等は孰れも労働に従事することを拒絶せられたる場合のみ獨り救助を乞ふに至るものなるが然も救貧所は悉く皆満員の有様なり。耕夫等は元々彼等を維持するに足らざりし仕事に更に新らしき競争者來りて之と激甚なる執業の競争を行はざる可らざるを痛く憾みつゝあるなり」と叫んでゐる。

彼は更に曰ふ「服装乗物に贅澤の極みを盡せる紳士貴女が電の如く往來する幾多の都市に、首府に、ハイド公園に、十人乃至二十人より成る製造者の仲間は一轉瞬の注意をも惹起すること能はずして、椅子に腰を落したるまゝ身動きもせず、眼には失望の色を湛え激昂は其四肢の力を奪へる姿を睹るなり。製作場の三分の一は閉鎖せられ、殘る三分の二も廳て同一の運命に際會せざる可からず、而してあらゆる店舗には商品堆積し、製造品は其生産費の半ばをも償ふに足らざるに代價を以てあらゆる方面に販路を求めつゝあるなり。此一般的窮乏の状態に際し、労働者は到る所に解雇せ

られて、英國民は蒸氣機關を以て之に代用しつゝあるなり」と。事情正に斯くの如く「全般の幸福進歩策を説ける科學をして普通の智識と接近せしめ俗耳に入り易き言語を以て之を説述するの一事は固める人類の最も痛切に其必要を感じつゝある時に當り、經濟學は全く抽象架空の論に歸して、愈々益々贊同し難き揣摩付度を包有するに至れり」と嘆息してゐる。

シスモンデは英國經濟學派の巨擘デヴィッド、リカードとジェエローに長い會談を試みた時、彼の言に答へて「何、何、然らば富は窮極の目的にして、人間は絶對に何等の價値なきに至るにあらずや」と絶叫した。これリカードが長逝する少しく以前のことである。

シスモンデは斯く英吉利が佛蘭西に教えた經濟學説を棄却すると共に新産業組織を誘致して現代の社會制度を破壊せんとする幾多の新學説に對しても尙ほ多大の遺憾を忍んで反對しなければならなかつた。ロバート、オーヴェンの共同組合に關

する學説、サン、シモンの學派及びフーリエの意見を奉ずる者は逐次に彼の排斥する所となつた。

「自利心の發動を抑壓することを企圖し、以て世界は之なくして進歩することを得可しと思惟するは、洵に大膽至極のことなり。然れども社會に於けるあらゆる労働、あらゆる社會的利益の遂行は常に投票の多數に由りて決せらる可きものなりと想像するは愚人の社會を真似るに等しきものなり」と難じ、更に他を排して自利心の衝動を除きて社會の進歩を計らんとするは宛も身體よりあらゆる筋肉を悉く奪ひ去つて、而して後歩行す可しと命ずると等しきものであると謂つてゐる。彼は

悲痛の調を以て「彼徒の主唱する所は諸君より希望、自由、家族的愛情、換言すれば諸君をして幸福ならしむるものゝ全部を奪はんとするものなり。寔に彼等の著書中には其治療を試みんと企てたる病患の外何等の眞なるもの存せざるなり」と絶叫するを禁じ得なかつた。

シスモンデは經濟學者にも社會主義者にも共に

黨すること能はずして獨り悄然と當時の思想界に立つたのである。當時の經濟學者は彼等が創造した經濟學を愛するに熱中して、神の創造した人間、萬學窮極の目的たる可き人間を閉却して居つた。社會主義者は物質的の幸福を求むるに急にして人間の神聖なる由來と其永世不變の歸向とを忘れてゐる。彼等は兩極端に對立しながら共に物質崇拜の弊に陥つてゐる。彼は此點に於て兩者を併せて攻撃したのである。

彼が其社會科學の第二編として一千八百三十七年に第一巻を出版した「經濟學の研究」(Etudes sur l'Économie Politique)は其大半をヘスチアで起稿したものである。即ち彼は一千八百三十五年八月下旬未だ長らへて居る其姉の家族の者を見んとする希望に驅られて其地に赴いたのである。

初めて天然と人類に對する愛を彼の心裡に喚起した此美しい沃野は彼が常住不斷要求して息まざる地主と小作との共同一致、資本と労働との調和結合の有様を再び新に此の經濟學者の眼に映せし



めた。彼は復も九十九年の永代借地法に彼が以前に研究したリヴェロと稱する地代穀納の制度が農夫をして全然其耕圃と不可分の關係を生ぜしめ宛も彼等が土地を愛する情は完全なる所有權を有すると異ならざるに至らしむるの好結果を發見した。彼は復其收穫を折半して其一を享受し、元と何物をも所有せずして、然も常に満足して安穩の生活を送り、衣食事足つて道徳心備り、將來に對して窮乏の不安なく、幸福、安全、自由、變化、希望茲に發するかのメザヨオロと稱する農民の樂しい居住に親しく出入して其生活狀態を寫した。榆の樹や、葡萄の飾冠や、橙、佛手柑の花環を見事に撒き散した小農圃に農民等が樂しく歌ひ連れて、祝日の圍ひ面白く、日々の勞働を愉快氣に行ひつゝある此タスカニーの光景は廣く美しい愛蘭の渺茫際涯なき麥畠や芋畠と最も驚く可き對照を爲してゐる。此豐饒な沃野には堆高く積まれた收穫の唯中に貧しい農夫や食を得ない幾多の窮民が今や當に餓死せんとしつゝあるのである。

然しながらシスモンチは彼が三十年前に初めて訪れたかの羅馬のカムパグナを再び一千八百三十七年に横ぎつた時、彼は如何にして、此地が世界の各地から多數の貴顯紳士や閑散階級を吸收して遙々此所に來訪せしむる藝術的な快味を嘗めることが出來なかつた。シスモンチは絶叫した。「予は此地に於て僅に一の聲を聴き得るのみ。氣息奄々として羅馬の衰滅と痛苦とを物語りつゝある瀕死の社會の聲是なり。予が眼に映するもの即ち紀念碑、寺院、家屋、草舎鋪石、總べて都市を形成しつゝあるあらゆるもの、急速なる廢頽は皆痛切に時代の推移を示さざるなし。地方の人口は既に滅失せり。而して余は都市の人口が纏て亦滅失するの期もさまで遠からじと想像せざるを得ず。高僧や列強大使の食卓より落つる麵麩屑に生活するを常習とせる大勢の寄生蟲に是等の食卓が何物をも載せざるに至りたる時は全く其糧道を失ふに至る可きなり。僅々一百の大地主の間に分たれたる耕圃は人煙絶えたる荒蕪地と化するの運命に瀕し

風は雜草荆棘の時を得顔に生ひ廣がれる曠野を渡りて非情の聲を放つに至らん。而して都市の製造場も既に無職の人民に取りて避難所たること能はず。何となれば富者は羅馬の製品を消費するを欲せず、貧者は之を購入するの資力なきが故なり。空亡瀕死せんとしつゝある大都會の光景は人をして轉々凄愴悲愁の感に堪えざらしむるなり」と。

(十六)

吾人は之より彼が二十四年間の心血を傾注し、歴史上の著作中最も偉大なるものにして其名譽の主たる基礎を成して居る佛蘭西國民史に就いて少しく注意を拂はなければならぬ。伊太利共和邦の歴史を書き終えたシスモンチは等しく其の追想の情深き國土の歴史に著手したのである。數度一時的征服の場と爲り來りし其領土は幾多侵略の敗墟から形成せられ、ゴール人の勇猛、羅馬人の傳説、日耳曼民族の不覇、聰明、武勇、燥暴、理知を保有し、大冒險を企圖せんとする性質並に敏活に事を成就せんとする傾向と、活動せしむること容易

なるも、平靜ならしむること困難なる心意とを有し、七世紀間國家建設の大業に盡瘁し、最も極端なる分裂の狀態より最も強固なる結合を見るに至り、中央集權の專制王國を経て自由平等の時代に入り、對外的關係に於ては常に歐洲に於ける中心點たる地位を利してあらゆる國民と接衝し、他の思想を國內に移入すると共に斷えず他國の運命を動し、愈々一般的なる英智、高尚なる品性、偏狹ならざる愛國心とを享有して昔より今に至るまで普遍的思想の鼓吹者と爲り、一般的利益の擁護に努め而して如何なる他國民よりも人類同胞の爲めに貢獻する所大なりし佛國民の歴史に其筆を運んだのである。

シスモンチが佛蘭西國民史の稿を起したのは宛も其の頭腦發達の頂點に發し精力充溢を極めた秋であつた。正確なる資料に對する深刻なる研究と聰明にして精勵なる努力とは從來未だ曾て見ざる完全誠實なる態度を以て其歴史を描寫することを得せしめた。幾多の侵略及び其結果たる同一地域

上に於ける多數民族の共存、封建制度、同一國內に於ける特殊階級の分岐、最後に王權の増大並に勝利、之に據りて徐々に行はれたる領土の合一、諸民族の混化と一國民の合成、政權の漸進的集中、此等の諸點に關する大問題の殆ど全部に就きて彼はあらゆる前代の歴史家よりも更に善く理會し更に善く之を論評して居る。此等の問題の多くは彼に満足なる解決を暗示し、其全部若しくは一部を完うすることを得た、而して吾人は歴史科學に對する近世の智識中其效を彼に歸し得可きもの頗る多しと稱することが出來ると思ふ。

彼は初めて衰滅の域に傾いた羅馬帝國の暗黒なる光景、領域に對する中央政府の干渉攪亂、都市の災殃、地方人口の減退、自由民び軍人階級の零落、並に財政の窮乏を明確に描寫した人である。彼は初めて日耳曼民族の侵略に眞の意義を與へた人である。彼は日耳曼侵略が其當初極めて勢力微々たりし事實を示した。彼は最初の二種族中に於ける野蠻と文化との融合作用を敘した。彼はカ

ーリンゲン帝國瓦解の複雑した原因を一々指摘した。而して封建時代に解體分岐した其領土各部の地方的歴史を敘述し、地方自治區の起源を探究し、市民並に農民中に於ける最初の組合聯合を指示し中古に於ける資産の状態、商業の關係、工業の振興を説明するに當つても彼は多量の史料と明晰なる頭腦とを有して居つた。寧ろシスモンデは此等の點に關して特に傑出して居ると稱することが出来る。彼以前に在つては何人も未だ斯くの如く國民内部の状態に起つた經濟上の變動が其政治組織の形態並に其存亡の危機に及ぼす影響を明確に示したものはないのである。彼は等しく善く領域が王國の歴史に關與した點を指摘し、而して又該王國と他の歐洲諸國との關係をも研究した。

シスモンデには此等の長處を具備すると共に、又憾む可き幾多の短處を發見することが出来る。彼にして若し此等の短處を免れることを得たならば其大著は更に精密の點を加へ、更に完璧のものと爲ることが出來たと信するのである。此著の結

構には尙ほ一段の機巧を要し、其敘説には一層の生氣を要し、其描寫には尙ほ多くの色彩を要し、其用語には更に一段の雅趣を要するのである。加之全般に亘つた大法則を吾人に示さんが爲めには彼は精密なる部分的説明の外に超出することを要し、時代の風習及び人物の行動に批判を下さんが爲めには絶對硬直な道德的原則の規矩準繩に従はずして、吾人の思想感情から離れた時代の趨勢、時代の必要に照し最も公平なる考察に基いて之を行ふ可き者である。略言すれば吾人は加特力教及び王權に對して嚴正なる歴史家の批判を下しつゝ、ある其奥底に新教徒にして且つジエニロー共和市の市民たる精神を發見するは誠に好ましからぬ所である。然も這般の缺點あるに拘らず、佛國民史は最も名譽ある彼の紀念碑である、佛國民は時に或は自國に對して端嚴なる態度を以て迫るとあるも然も常に多大の愛情を寄せて居つた彼、該博なる知識を有し、深刻にして確固たる判斷に富み大なる能力と謹慎なる誠實とを具へ、二個の相異なる

時代に跨りて十八世紀の學派と十九世紀の學派との間に過渡期を畫し、前者の寛大なる原則に従つて其嘲弄的の輕躁なく、後者の智識を具備して悉く其思想の自由を有することなき彼の最大なる此產物に國民を練磨す可き他山の石を見出す可きである。

其後彼が一千八百三十九年に至つて抄録して二卷と爲した此佛蘭西國民史は實に彼が汲々乎として其餘世を傾注した大事業であつた。彼は一千八百十九年に佛國より招聘せられた經濟學の講座を辭し、更にジエニロー州參事會より彼に附與せられた歴史學の特別教授の稱號を辭したが故に其全精力を擧げて之に盡瘁するに出來た。彼が初めて此大事業に著手するの決意を爲し、材料の蒐集を企てたのは一千八百十八年五月のこと、一千八百二十一年に至つてツロイテル及びヴルツの手に最初の三卷を出版し、翌二十二年に四卷より六卷まで、二十六年に七卷より九卷まで、二十八年に十卷より十二卷まで、三十一年に十三卷より十

五卷まで、三十三年に十六及び十七の二巻、翌三十四年に十八巻、三十五年に十九及び二十の二巻、翌三十六年に二十一巻を續刊し、一千八百三十九年にはベスチアに於て起稿した同書の抄録二巻を出し、歸國後、其二十二巻を刊行し、次で四十年に二十三及び二十四の兩巻、翌四十一年に二十五及び二十六の兩巻、而して更に其翌四十二年に二十七巻より二十九巻までを出版した。

(十七)

シスモンデが一千八百十九年佛蘭西よりの招聘を辭したのは之まで常に行ひ來つた如くタスカニに於て年内の數ヶ月を母の膝下に送らんとするの希望が痛切であつたが爲めである。然しながら彼は纏て此楽しい日子を奪はれることゝ爲つた。彼の父は一千八百十年忽然として不歸の客と爲つた。シスモンデは父の臨終に會することが出来なかつた。一千八百二十一年同じ様な不幸は更に痛酷に彼を襲ふた。九月の終に其母がベスチアに於て危篤に陥つたとの報知がジェニエーゾに傳はつ

た。彼は直ちに此地を立つて晝夜兼行したが、其ベスチアに到着した時は既に遅かつた。九月三十日の夕暮、老シスモンデ夫人は死の近づいたのを知つて、最後まで其鋭敏沈靜な想像力を失はず、居間の窓端に其寢臺を運ばせて、入目を浴びた美しい光景を眺めやりつゝ、愛息の傍に侍せざることに何等の思ひ残す所もなく、天堂の奏樂を耳にしつゝ、靜かに冥目したのである。斯くの如くして彼の生涯を教え導くと共に生活の慰安と爲つた其母は白玉樓中の人と化した。シスモンデが胸中の憂愁は極度に達したのである。

彼は纏て妹夫婦を残してベスチアを去つた。彼は深く此妹を愛し、其子供等のことを常に念頭に掛け、大なる愛情を注ぐと共に有益なる教訓を與ふることを忘れなかつた。彼はジェニエーゾに彼を待つ最愛の同伴の元に歸つた。彼は二年前より其人と同棲して居つた。即ち彼は一千八百十九年ジェツシー、アレン嬢と結婚の式を挙げたのである。嬢の令姉は彼の友人なる有名なサー、ジ

エムス、マツキントツシの夫人であつた。其妻の高尙な思想、美しい品性、溫雅な性向、爽やかな、柔しい、敬虔な心は彼が後半世の慰安となつた。

シスモンデは此結婚の後ジェニエーゾの町から一里半程隔つたシエンの村近くに二構えの田舎家を購入して此に移つた。折々佛蘭西、伊太利及び英吉利に旅行を試みた外、二十年餘の歲月を此處に送つて、或は學術的研究に耽り、或は自由制度の齎した災厄の爲めに業を奪はれて塗炭の苦を嘗めつゝある下層人民に殊に慰安を與ふることを努め、而して清い大なる名聲に圍繞せられて、彼の才學はジェニエーゾ人の誇と爲り、幾多の著名なる外客は駕を此に枉げて彼を訪れた。此地に於ける彼の日常生活は何等の變化なくして過ぎた。少くとも一日八時間は之を歴史の爲めに割いた。其餘の時間を以て其慈愛に富んだ思想を弘布し、貴重なる利益を擁護し、或は近郊の逍遙に嚮を散じ、或は歐洲各地に於ける會心の知己に優しい情の籠つた美しい書信を發し、夜は各國の客人と其國語

を以て自由自在に對話して楽しい休養を得て居つた。

一千八百三十八年佛蘭西の倫理政治學會(Académie des sciences morales et politiques)が彼を其外國會員の一人に推選したことを聞いて満足の意を表したのも此處である。一千八百四十一年佛蘭西國の貴き紀念として、曾て一千八百十五年に那翁に由りて提供せられ、潔く其拒む所と爲つた表章を受けたのも亦此處である。

最も好く彼の思想と感情とを傳へてゐる未刊の日誌に據ると彼は其著手した歴史上の大作を完結す可き餘命を與えんことを神に念じてゐる。然しながら生前其事業を完成せんとの貴き念願は悉く之を達することが出来なかつた。四十七年間殆ど一日として廢したるときは努力精勵、長く濫い友情を交はした親友等が死の手に奪ひ去られたこと並に其慈心深き希望が幾多の事變に其の大部分を破壊せられたことは彼の心身を衰弱せしむるの因と爲つて、終に彼は不治の病の襲ふ所と爲つ

た。彼は長らく胃痛を患へて居つた。彼は臚て醫  
を遠ざけた。蓋し此難症に對しては醫術の效驗少  
なきを覺つたのと、著作を禁せらるゝとがづらか  
つた爲めである。斯くて彼は滿二箇年間激しい病  
苦の發作と戰つて佛國民史の筆を運んで居つた。

シスモンヂの病勢は一千八百四十一年に起つた  
ジェネローヴの憲法改正の紛亂の爲めに一層其進み  
を早めることゝ爲つた。彼は爾來常に眞面目に熱  
心に其郷土に對する責任を盡して來た。共和州の  
會議には彼は少なからざる貢獻を爲した。殊にエ  
チオン、デイモンと協力して一千八百四十四年の憲  
法改正に盡瘁した效績は永く没す可らざるものが  
あつた。ジェネローヴは四人のシンデックス(Syndics)  
と稱する任期一箇年の奉行と之を撤することを得  
る州參事院と並に全市民に選舉せられたる代議院  
とに由りて統治せられて居つたが、急進黨は這般  
の政體を以て眞に民主的なるものに非ずと爲し、  
終に一千八百四十二年三月三日の蜂起と爲り、暴  
力を以て之を顛覆し立憲會議の召集を要求した。

シスモンヂは復も其一員に擧げられて、病苦と衰  
弱とを意とすることなく、其郷土に取りて舊來の  
制度の有益なる所以を最後に至るまで主張せんと  
して其老軀は會議の場に運ばれた。彼は唯だ一人  
毅然此滔々たる輿論の潮流に抗するの勇氣を有し  
て居つた。彼は唯一人奮然として勝利に誇る急進  
黨の改革案と戰つた。病苦も衰弱も比肩も銃砲も  
彼の意氣を屈することが出来なかつた。將に滅せ  
んとする燈火が一段の光輝を放つが如く、彼の才  
華は悉く此時に燦發したのである。一千八百四十  
二年三月三十日彼は其同胞の前に立つて悲壯凄絶  
な演説を行つた。然も彼が經驗に富んだ理論も、  
嚴正なる愛郷心も熱狂して聽衆の上に充分の效果  
を與へることが出来なかつた。辯士は叫ばんとし  
て呼吸迫り、失神しては幾度か倒れんとした。此  
の苦い經驗は彼が最後の勇氣をも喪失せしめた。  
再びシエンに運ばれた彼は再び此所を去ることが  
なかつた。然も彼は其の死期がさまで近づいたと  
は知らず、今一度、ペステアに赴き、タスカニ

の美しい空の下に、彼が嘗て植ゑた花卉や果實や  
樹木の間に、常に彼を愛護して慈母の上を追想し  
つゝ冥目せんことを願つた。彼は自ら記して曰ふ  
「予は今より永久此地を去るを毫も遺憾とせず、  
予がジェネローヴの朋友は殆ど皆死せり、而して予  
は斯く荒れ果てたる光景と斯く多數の墳墓とを見  
ることなきに至るは自ら慰むる所以なりと信する  
なり」と然れども彼は臚て次第に死期の近きを明  
に感ずるに至り、此最後の希望をも放棄せざる可  
らざることを、其生前に成就せんとして病床に呻吟  
しつゝ、致々として其筆を擱かなかつた大著の終編  
の稿も終に之を抛たざる可からざるを知つたので  
ある。彼は幸じて廿九卷まで續くことが出來た、

彼は衰弱に衰弱を重ねつゝある其手に最後の校正  
刷を正誤した。彼の精神は絶えず確かなものであ  
つた。彼は神色自若として殘忍なる死が徐々と近  
づきつゝあるのを忍んだ。六月二十五日彼は午  
後一時頃まで一言をも發せず、身動きだもせずし  
て病床に横はつて居つたが、臚て「起して呉れ」と

傍に依頼し、衣服を改めて長椅子に身を横たへ、  
再び靜止の状態に入り、其周圍に慰安の言葉を送  
り、聲絶えて彼は斷腸の思を爲しつゝ、ある其妻に  
柔しき告別の情を眼に示して、午後三時眠るが如  
く息絶えた。享年六十九歳である。

(十八)

シスモンヂは嘗て痛切なる語氣を以て「予は何  
等の印象をも殘さず、何事も爲すなくして此世界  
を去らんとするなり」と叫んでゐる。彼が多數民  
衆の意見は最も賢明なる者の意見と等しきものに  
あらずと説いた時、彼の思想は退歩したものと認  
められた、手の勞働を節約するの技術は決して人  
を強要して更に重大なる勞働を負擔せしむ可きも  
のでないことを主張した時、彼は夢想家として嘲笑  
せられた。然も這般の事實は却つて彼が時代の潮  
流に流して毫も撓まなかつた事實を示してゐる。  
彼の觀察、彼の思想は普く一般社會の肺腑に入つ  
た。彼等は彼の觀察思想に新しい衣を纏せて更に  
之を世上に宣揚した、彼等は往々にして自己が主

張し弘布しつゝある思想はシスモンデの思想主義及び主義であることをすら忘れてゐる。

經濟學上の自由放任主義に對して先づ不滿の念を抱いたものはシスモンデである。其學徒ブーヴエが自由放任(Laissez faire laissez passer)は窮極「困苦窮乏をして其威を逞しうせしむ可し、死するものあるも干渉す可らず(Laissez faire la misère; laissez passer la mort)」と稱するに等しきを幾度か繰返したのは唯だ彼の亞流を汲んだに過ぎざるものである。

自己の勞働の結果を他人の手に歸せしむる經濟制度に對して攻撃の矢を放つたものは彼である。吾人の後裔が勞働階級をして常に不安固の狀に在らしむる現代の社會組織を野蠻視すること敢て吾人が曾て彼等を奴隸の境遇に置ける前代を視るに異ならざるに至る時代の必ず到來す可きことを絶叫したものは彼である。

果して到る所に貴い人間が生産増加の爲めに犠牲に上げられつゝある事實を認むることなきやを

問ふたものは彼である。勞働者は幾多の職業より追はるゝに至つた。人類を給養するの用を爲さざるものとすれば財富の増加亦何等の望しき點がないのであると説いたのは彼である。

普く社會各員に生活上の利益を分たんとことを要求したものは彼である。社會の一員が他より奪つた所のものを以て富と稱することを拒んだものは彼である。一般の利益は各人の權利を制限す可きものなることを叫んだものは彼である。財産權は利用する權利で安用する權利でないことを主張したものは彼である。

シスモンデはオーコンネルに先立ち彼と等しき大膽と更に大なる力を以て「愛蘭の社會的狀態は不良の極に達せり。根本よりして之を改革せざる可らず。同國刻下の問題は飢餓に迫れる貧民に慈善の麵麩を與ふるにあらずして、双手を以て唯一の財富と爲せる各人に其存在と資産とを獲せしむるにあるなり」と絶叫した。

シスモンデよりも更に烈しき熱度を以て「富者

は豊饒にして且つ耕作に便なる土地より遊惰を貪る可き財富を得つゝあるに反し、此所得を發生せしめたるもの、其汗を以てあらゆる生産を濕したるものは之に一指をも觸るゝこと能はずして餓死するに至る、これ明に一種の劫掠なり、富者が貧者より略奪を行ひつゝあるものなり」と叫べる急進主義者ありや。

眞の貯蓄銀行は土地であることを人民に教えたものは彼である。人民の徳性を進めんが爲めには先づ彼等に將來を與へなければならぬ、即ち吾人の道徳的觀念は將來に對する預見と相關聯して居ることと統治者に教えたものは彼である。

「貴族の分子が國家より根絶せられたる日は正にそが營養分を得つゝありし土地を棄て、自殺を行ふの日」なることをあらゆる其著書中に繰返し、例證を引き併せて之に對する考察を下したるが爲めに貴族的精神を有するものなりと罵られたのも彼である。

「貧民階級を庇護し其疾苦を軽減せんとするは諸

般の慈善的努力に依るの外ある可らず。寸毫の餘暇を有せざるものに取り學校は何等の利用す可き點ありや。定職を得ること能はずして其最も苦痛大なる肉體的勞働を最低價に販ぎつゝあるものに教訓は何等の用かある。馬鈴薯の外何物をも有せざるものに貯蓄銀行は何等の用かある」と常住練り返して居つたものは彼である。

富は目的にあらずして單に手段に過ぎずと爲し農夫や手工や、勞働者や總て己が額の汗に麵麩を得つゝあるものに溢るゝが如き同情を注いだものは彼である。

彼が堅忍不撓の研究、赤心を吐露した警告は決して效果なくして終る可きものでない。事實は著々と其歩を進めた。それに伴れて曾 彼か一般社會をして信せしむること能はざるを痛嘆したるものも終に其確認を得ることゝ爲つた。彼の所言が累累たる美果を結ぶの日は來りつゝあるのである。須臾も彼の念頭を去るとが出來なかつた勞働階級が正當なる分配を得て文明社會の徳澤に浴す可き

の目は今や將に來らんとしつゝあるのである。

(完結)

眠中に於けるよりも、より多く覺官知覺に類似するからである。

### 「ヴント」氏生理的心理學 所載の變體精神現象(其三)

稻垣末松

#### 第三章 催眠狀態

##### 第一、催眠をなさしむる外部の條件

催眠とはどういふ狀態の謂であるかといふに、之は睡眠狀態に似寄つたものであつて、其の異なる所は、睡眠狀態に於ては凡ての官能が中止するに催眠狀態に於てはたゞ一部分の官能のみが中止するといふにあるのである。従つてかの睡遊即ち夢中に諸種の運動をなす様な狀態は、是は催眠狀態に似寄つて居るのである、其の譯は睡遊中に於ては常に身體の運動が試みらるゝ計りでなく、更に外界の印象に對する覺官の興奮性は増進して居つて、之が爲に、其際に現はれる觀念は通常の睡

眠中に於けるよりも、より多く覺官知覺に類似するからである。  
此の睡遊といふ狀態は或る一部僅少な人に限つて起る夢の一種の形式であるが、之と同様に、催眠狀態も人によつて種々に變ずるのである。催眠狀態を來さしむるにはどうしたらよいかと云ふに、平等一様か又は平等一様に繰返される覺官的刺激を與へればよいのである。例へば手を以て被験者の顔をそろ／＼なでるとか、又は光輝ある物體を長く見詰めしむるとか、若くは時計のち／＼のやうな平等一様の音を聞かせるとかするが如きである。但し度々催眠をさせられたものに於ては、別に此等の刺激がなくも眠らする事が出来る。此の際強い影響を及ぼすものは心理的動力である。そこで、幾度か催眠をさせられて興奮性の強くなつて居る者に於ては、施術者の「眠れ」といふ一言の命令で以て催眠せしむる事が出来る。或は又被験者に於て余は之から一種奇妙な現象を呈する事が出来るとの觀念を抱くならば、それも有力な影響

を及ぼすし、殊に此の人に施術されたなら余は必ず催眠するとの信念を有せしならば、其は甚だ強い影響を及ぼすのである。否單に、之から少し時間立つか又は何か外界の印象を與へられると余は眠るかも知れぬとの單一なる念慮でも催眠を來さる事が出来る。さうして此の如くして催眠を來さしめたり、又はその催眠中の経過や狀態を左右したりする所の心理的影響を稱して通常暗示(ブツゲスチオン)といふのである。

##### 第二、催眠狀態の種類並に段階

催眠狀態は、其を來さしめた刺激の程度や被験者の感受性の強弱などによつて様子を異にするのである。そこで、今此等の標準からして催眠狀態を區別して見ると、それは三個となる。第一は輕催眠狀態であつて、第二は深催眠狀態、第三は睡遊である。此等は各々段階的になつて居て、第一は第二の豫備となり、第二は又第三の豫備となるのである。さうして又此第一狀態は時に昏睡狀態と稱せられ、第二は全身強直狀態とも稱せられるのであ

る。  
此の第一狀態は通常の輕い睡眠即ち半睡眠狀態と差して變らぬので、ある。即ち眼は閉ぢられ、呼吸や心臓の鼓動は微弱になり、身體は睡眠前と同じ位置を取り居るのである。

されど第二狀態になると、様子は全く異なるのである。之に於ては往々全身強直といふ現象が見られ、四肢は他人により運動されてもそれに對して何等の抵抗をせず、甚だ無理な位置にせられると雖も尙それを取得し、さうして此の催眠狀態が續く間、若くは與へられた命令が解除されない間は、此の通りの位置になつて居る。第一狀態から此の第二狀態に移るに就ては、都合のよい時には被験者の目の皮を上に向けて光線に向はしめさへすれば直に出来る。さうして又奇妙な事には、此の際之を半分上に向はしむると身體の半部のみが強直狀態になり、残りの半部は昏睡狀態に残り居るのである。尙又始め催眠をさせる爲に體を撫でるに當つても、若しも其の半部を撫でればその半部の